Chapter 4 Deciding what to test

3. Where do constructs come from?

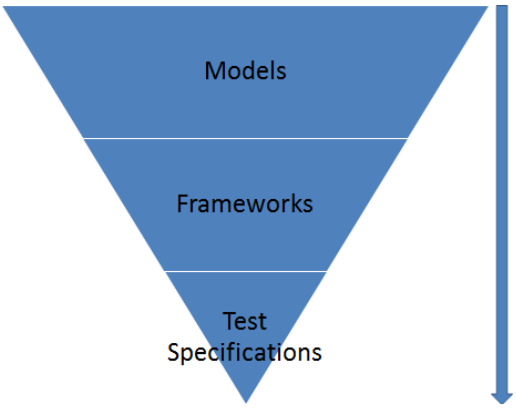
■ 構成概念とは、多くの状況で関連しうるものを抽象化したデザインのパターンのようなものである（しかしあらゆる状況で役に立つわけではない)。

(ex.) プロセスを理解して手順を実行する能力という構成概念は、航空技師と実験をする学生に共通して重要なものである。

⇔ 上記の構成概念はツアーガイドが予約を入れる際にも共通するが、ツアーガイドにはより広いコミュニケーションが求められており、予約はそのごく一部に過ぎない。

■ construct under-representative: テストが測定する構成概念が不十分で、スコアが特定の役割を果たすことができる能力を表していないこと。

■ テストの構造は、抽象的で上位のレベルから順に、モデル、フレームワーク、テストの特定から成る（テストの特定は 5 章で触れる)。構成概念は通常モデルにおいて説明されフレームワークでは目的に関する構成概念を選択する。



■ 多くの構成概念や無数の言語使用場面があるが、特定の状況で現れるのはそのごく一部に過ぎない。また最も熟達度の高い言語使用者でさえ、あらゆる状況で等しく熟達しているわけではない。

■ Lado（1961）では初めて、言語使用のモデルに構成概念を取り入れた。彼によるとコミュニケーションを成功させるためには、言語使用を自動化しなければならない。自動化は意味を伝えるための形式（音、語、文法単位）の選択において重要だとされる。

■ 言語上の意味は、背景にある文化的な意味が理解されて初めて理解される。Lado は文化に束縛された意味を、文化的背景を持つ人が言語を通して行動や思考の様式を伝えることとみなした。しかし同時に彼のモデルでは文化に埋め込まれた意味とは別に、言語使用者は個人の経験に基づく意味を伝えるとしている（図 4.3, p. 104 参照)。

■ このモデルでは、特定の状況におけるテストや評価に関連する構成概念の選択を経験則的に補助してくれる。しかしどんな言語形式や異文化コミュニケーションのタイプをテストするかは、テストのフレームワークを作る際に作成者が決めなければならない。

■ Byram (2000) では異文化コミュニケーションの成功のためには、以下の能力が重要であると述べている。

- 態度: 好奇心と寛容さ、つまり異文化や自文化への不信をいつでも止めることができること
- 知識: 社会集団やその産物、自国と対話相手の国における慣習、社会と個人の相互作用に関する一般的なプロセス
- 解釈と関連付けの能力: 異文化からのテキストやイベントを解釈する能力、それを説明して自文化のものと関連付ける能力
- 発見と交流の能力: 特定の社会とその慣習に関する新しい知識を獲得する能力、リアルタイムでコミュニケーションし交流するという制約下における態度や技能
- 文化への批判的な意識、政治教育: 時文化・異文化における明確な基準の観点、慣習、産物に基づき、批判的に評価をする能力

4. Models of communicative competence

■ あらゆるモデルは Hymes（1972）に強く影響を受けている。このモデルにおいて人間は、社会的な機能を持つ言語使用をする能力があるとされた。その能力は、以下の 4 つの知識から定義された。

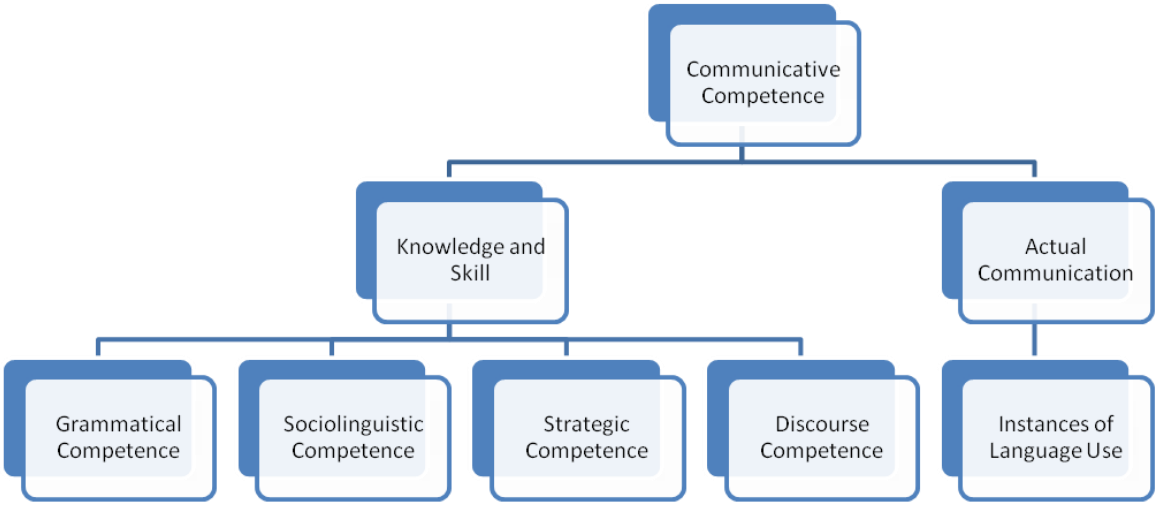
・ ある表現が文法・語彙的に言うことが可能か判断する知識
・ その表現が適しているか（feasible）判断・認識する（recognize）知識
・ その表現が文脈上言うことができるか判断する知識（他人と交流することで獲得される）
・ 実際にその表現を言うことが可能か判断する知識（実際にそのような表現が使われるか）

■ Hymes は文法能力と運用能力を、言語知識の 2 つの側面としたのである。このモデルは非言語的な要素を言語能力のモデルに取り入れた。Lado のモデルにも非言語的な要素はあったが、根底にあるパフォーマンス能力という概念は含まれていなかった。

Construct models

■ Canale のコミュニケーション能力の拡大モデルは、心理的・文脈的な変数を始めて組み込んだ。

・ actual communication: 記憶や知覚上の制約、疲労、緊張、background noise による意識の散漫や阻害といった、心理的・環境的な条件の制限下における知識や技能
・ 文法能力: 文法、語彙、形態素、統語、意味、音韻の知識
・ 社会言語能力: 社会的な文脈を判断して、状況に応じて適切な表現を行う能力
・ 方略的能力: コミュニケーション上の困難を解決する能力
・ 談話能力: テキストの構造、ジャンル、一貫性、結束生に関する知識



■ Bachman (1990) のモデルでは、(1) 知識と能力の違いを明確にし、(2) さまざまな変数が言語使用の状況と作用し合うことを示した。このモデルは言語能力、世間一般の知識、方略的能力から構成される。方略的能力は、以下の 3 つの要素から成る。

◆ 評価

・ 特定の状況でコミュニカティブな目標を達成するために必要な情報を特定する
・ その目標を達成する手間にはどの言語能力が必要か判断する
・ 対話の相手とどんな知識や能力を共有しているか判断する
・ コミュニケーションがどの程度成功しているか評価する

◆ 計画
・ 言語能力の情報を得る
・ 様式を選択する
・ 発話やアウトプットを合わせる
◆ 実行
・ 発話を明らかにするため、心理身体的なメカニズムを利用する
■ また Bachman のモデルで言語能力は以下のように説明される（図 4.5, p. 109 参照)。
◆ Organizational Competence: 従来の言語的な要素
◆ pragmatic competence: 適切な言語を産出するのに必要な知識
・ illocutionary competence: Halliday (1973) の言語機能の観点から Austin (1962) の言語行為を説明したもの
・ ideational function: 命題、情報、感情を表す
・ manipulative function: 他人との関係を維持するといった、周囲の環境への働きかけ、何かを完遂すること
・ heuristic function: 質問や学習を通し、世界に関する知識を広げること
・ imaginative function: ユーモアや美的な目的のために言語を使用すること

Discussion
■ Lado（1961）では文化的な要素を言語能力のモデルに組み込んだが、言語テストを作成する際は、文化的な背景知識を反映させるべきか、除外するべきか?
・ TOEFL の場合
→ 学生の国籍に関わらず純粋な読解力をフェアに測定するためには、文化的な背景知識がテストに反映しないようにするべき
→ 「非英語圏の留学生が北米の大学に適応できるか判断する」という TEOFL の目的を念頭に置くと、北米の文化的背景がテストに反映されていてもよいという考え方もある。また実際に本を読むときなど、私たちは普段の生活から異なるバックグラウンドの人物からのメッセージを理解しようと努めている。
※ ただしその背景知識がないとまったく正解にたどり着けないというテスト項目は不適切

■ モデルの拡大
・ かつて言語能力のモデルは言語能力と言語運用を区別し、特に言語能力の方に重きを置いてきた（e.g., チョムスキー)。しかし Hy,mes のモデルでは社会的な側面が、Canale のモデルでは心理的・文脈的な側面も考慮され、コミュニケーション能力のモデルは徐々に拡大していった。
・ Bacnman のモデルでも従来の言語能力（organizational competence）と非言語的な側面（pragmatic competence）が区別されたが、Canale のモデルにおける区別とは少し異なる。非言語的な側面に関し、Canale のモデルよりも Bachman のモデルの方がより詳細に分類がされている。